

帰属と妬みの関連性に及ぼす能力・努力普遍観の効果

坪田 雄二

(2011年10月6日受理)

The Effects of Conceptions of Invariable Ability and Effort on the Relations between Attribution and Envy

Yuji Tsubota

Abstract: The study investigated the effects of conceptions of invariable ability and effort on the relation between attribution and envy. The hypothesis was that people who had higher conceptions felt stronger envy on unstable causes than on stable causes. Although the hypothesis was not supported, the result showed that from the different point of view the relation between attribution and envy was influenced by conceptions of invariable ability and effort.

Key words: attribution, envy, conceptions of invariable ability and effort

キーワード：帰属，妬み，能力・努力普遍観

問 題

妬みとは、詫摩（1975）によれば、自分が非常に欲しいと思っているが、手に入れている何かを他者が持っていることを知覚したときに感じる感情といわれている。このような状況においてどのような感情を抱き、またどのように行動するかは、その後の対人関係に影響するものであり、他者とのかかわりを検討する対人社会心理学において重要な研究テーマである。

感情の生起と原因帰属の関係

感情に影響する要因として検討されたものの中に、原因帰属がある。原因帰属とは事象の原因を推測することであり、どのような原因を推測するかによって、その後の感情や動機づけが影響されることが報告されている。例えば Weiner（1985）は、達成課題における感情を以下の3つに分類している。1つは、成功や

失敗といった結果と直接結びつき、帰属に媒介されない感情（成功したときの喜びなど）であり、もう1つは、特定の帰属と結びついた個別的な感情（運に帰属されたときの驚きなど）であり、3つ目が、特定の帰属次元と結びついた感情（内的帰属による誇りなど）である。なお帰属次元とは、推測される原因を分類する次元のことで、達成状況における帰属次元として、①その原因が自分にかかわるものかそれとも自分にかかわらないものかといった内在性の次元、②その原因は将来においても同程度の強さを持った原因かそれとも状況が変われば異なるのかといった安定性の次元の2次元（Weiner, Frieze, Kukla, Reed, Rest, & Rosenbaum, 1972）や、③その原因は自分の力で統制可能かそれとも不可能かといった統制可能性の次元を加えた3次元が知られている（Weiner, 1979）。

帰属次元と妬みの生起の関連性の予測

それでは、帰属される原因の次元は妬みの強さとのような関係にあると予測されるのか。Weiner（1985）は、自分の失敗を内的な原因に帰属した場合自尊感情が脅かされることを示している。この自尊感情は、坪田（2011）によれば、妬みの規定要因として指摘され

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：深田博己（主任指導教員）、岡本祐子、
中條和光、樋口匡貴

ているもので、自尊感情を喪失することへの恐れが強
いほど妬みが強くなると考えられている。つまり、内
在性の帰属次元が自尊感情の喪失と関係し、自分の失
敗の原因を内的に帰属した場合、自尊感情が脅かされ
やすく、そのため、妬みが強まることが予想される。

また、自尊感情の喪失以外に、妬みの生起にかかわ
る要因として、獲得可能性があげられている（澤田、
2006；澤田・新井、2002；坪田、2011）。この獲得可
能性とは、自分が欲しているが今は他者が持っている
ものを将来自分がどの程度獲得できるとするかを表す
ものであり、獲得可能性が高いほど、妬みが強くなる
ことが示されている。この獲得可能性の要因は、帰属
次元との関連性では、安定性の次元と関係するものと
推測される。例えば、自分の失敗を安定的な原因に帰
属した場合、将来においてもその原因は同程度の力を
持つものとなろう。そのため、次回も今回と同様失敗
する可能性が高く見積もられるため獲得可能性は低い
であろう。一方、自分の失敗を不安定な原因に帰属し
た場合、将来におけるその原因の大きさは今回とは異
なっていることが予想され、そのため、失敗の可能性
は安定的な原因ほどは高くはないであろう。よって、自
分の失敗を不安定な原因に帰属した場合、獲得可能性
が高まり、そのため妬みが強くなることが予想される。

過去の帰属と妬みの関連性の研究とその問題点

このような原因帰属と妬みの関連を検討した研究
に、Mikulincer, Bizman, & Aizenberg (1989)がある。
Mikulincer et al. (1989)は、仮想場面法を用いた研
究3において、内的な帰属が行われた場合と安定的な
帰属が行われた場合に妬みが強いことを報告してい
る。内在性の次元に関しては上記の予測と一致した結
果を得ているが、安定性の次元においては予測とは相
反する結果を得ている。また、同様の帰属と妬みの関
連を検討した坪田 (1993)は、仮想場面法という同じ
手続きを用いた研究1において、外的帰属が行われた
場合に妬みが強いことを報告している。内在性の次元
に関しては予測と相反する結果であり、安定性の次元
では効果はみられていない。

このように原因帰属と妬みの生起の関連性の結果
は、内在性に関しては、予測と一致する結果と予測と
相反する結果といった影響の方向性に矛盾した結果が
得られ、安定性に関しては、一方のみで効果がみられ
、その方向も予測とは相容れないといった問題点が存在
する。これら2つの研究は、2名の人物が登場する状
況で、一方は成功し、他方が失敗した仮想場面を提示
し、失敗した人物の原因帰属情報を提示した際の妬み
の強さを推測させる手続きで妬みを測定している。そ
の際に用いられた原因は、内的で安定的な原因として

能力を、内的で不安定な原因として努力を、外的で安
定的な原因として課題の困難度を、外的で不安定な原
因として運を使用している。いずれも Weiner et al.
(1972)の2次元の分類において代表的な原因として
取り上げられているものであり、それぞれの原因自体
が内的か、外的か、あるいは安定的か、不安定かにつ
いては妥当なものと考えられる。

能力観における能力・努力普遍観

ところで、達成行動の目標を規定する要因を検討し
た研究では、能力をどう考えるかといった能力感が影
響することが知られている。Dweck (1986)は能力
は固定的なものであるとする考え方と、能力は変えら
れるとする考え方の2種類あることを指摘しており、
Hayamizu, Ito, & Yoshizaki (1989)は、中学生や高
校生を対象とした調査から、能力は普遍的なものとし
る能力絶対視の因子、能力も努力も重要で努力によっ
て能力も高まるとする能力努力相対視の因子、努力す
ることを重視する努力信仰の因子を見出し、越
(1991)は、大学生を対象とした調査から努力重視、
能力重視、能力・努力の普遍性の3因子を見出して
いる。これらの研究は、普遍的である対象を能力だけと
するか、能力と努力をあわせて考えるかといった点や
調査対象者が中学生と高校生か、あるいは大学生かと
いった点で異なることや Hayamizu et al. (1989)の
研究を参考とした越 (1991)の因子分析の結果では、
能力努力相対視の因子が見られなかったことなど、一
貫していない部分もあるが、能力感を構成する要素の
中に能力や能力・努力を普遍的なもののみならず考え
方の存在を指摘している点では共通していると思われる。
本研究ではこのような考え方を能力・努力普遍観
と命名し、これを帰属と妬みの関係を検討する際に導
入した。

能力・努力普遍観が帰属操作に与える影響

上述のように、帰属と妬みの関係を検討した研究で
は、能力、努力、課題の困難度、運を用いて帰属情報
を操作している。このような操作は能力・努力普遍観
の違いによって受け止め方が異なることが予想され
る。どのような認識の違いが生じるのかをまとめたも
のが Table 1 である。表示したように、帰属次元と
して操作された安定性はその人の持つ能力・努力普遍
観によって異なる意味を持つ。上記の帰属と妬みの関
連性を検討した2つの研究では、このような能力・努
力普遍観は考慮されていない。そのため、帰属次元と
して操作したものと実験参加者が認知した帰属次元が
異なることも考えられる。

Table 1 能力・努力普遍観による帰属情報の認識の差異

帰属情報	能力・努力普遍観低群	能力・努力普遍観高群
内的次元 (能力、努力)	内的かつ不安定	内的かつ安定的
外的次元 (課題の困難度、運)	外的	外的
安定次元 (能力、課題の困難度)	不安定+安定	安定
不安定次元 (努力、運)	不安定	安定+不安定

本研究の目的と仮説

そこで、本研究では、能力・努力普遍観の要因を導入することで、帰属と妬みの関係性に違いが見られるかどうか探索的に検討することを目的とした。過去の2つの研究の問題点のうち、特に安定性の次元の結果に対して検討を行った。能力・努力普遍観は能力や努力が変わりやすいかどうかについての認識であり、これは原因の安定性の認識に直接かわかるものであること、そして、Table 1からもわかるように、安定性の次元では安定か不安定かの違いのみであるが、内在性の次元では、安定かどうかとともに、内的か外的かの条件も加わるため、どちらの効果も明確になりにくいことが理由である。

能力・努力普遍観の要因によってどのような影響が見られるのかについては、次のように考えられる。前述の予測のように、不安定な原因では妬みの生起要因として考えられる獲得可能性が高まるため、妬みが強まる。Table 1の安定性の次元をみると、能力・努力普遍観低群では、安定的な原因として操作された原因の中にも、不安定な認識を生じさせる情報が含まれるため、安定次元と不安定次元の差は小さい、あるいはないが、能力・努力普遍観高群では、不安定な認識を生じさせる帰属情報は不安定次元にしか存在しないため、不安定次元で妬みが強くなることが予想される。

方 法

実験計画

独立変数 性(男、女)、帰属次元の内在性(内的、外的)、帰属次元の安定性(安定、不安定)、能力・努力普遍観(高、低)の4変数で、すべて参加者間変数であった。

実験参加者 大学生男子42名、女子45名。回答に不備のあった者を除外し、84名を分析対象とした。

実験手続き 坪田(1993)で使用された状況文を参

Table 2 実験で用いた場面

<就職場面>	
あなたとAさんは、仲のよい同性の友達です。二人はファッションメーカーに関心があり、あなたはファッションメーカーのα社に、Aさんはβ社に採用試験を受けに行きました。あなたはα社に入るためにファッション業界についてある程度勉強していたので、『Aさんが不採用になることはあっても、自分が不採用になることはないだろう』と思っていました。ところが試験の結果、Aさんは内定をもらったのですが、あなたは不採用になってしまいました。このような結果になったのを、あなたは『……………』と思いました。	
<スポーツ場面>	
あなたとAさんは、仲のよい同性の友達です。二人は違う会社に勤めていますが、テニスが好きで、同じテニスクラブに入っています。しばらくして、それぞれの職場でテニス大会が開かれました。あなたは仕事の都合で毎日ではできませんでしたが、週3日は練習していたので、『Aさんが負けることはあっても自分が負けることはないだろう』と思っていました。ところが、Aさんは大会で優勝し、自分は1回戦で負けてしまいました。このような結果になったのを、あなたは『……………』と思いました。	

Table 3 実験操作に用いた帰属情報

<就職場面>	
内的・安定	自分の能力が劣っていたからだ
内的・不安定	自分の努力が足りなかったからだ
外的・安定	α社の採用人員が少なく、競争率が高かったからだ
外的・不安定	たまたま運が悪かったからだ
<スポーツ場面>	
内的・安定	自分の能力が劣っていたからだ
内的・不安定	自分の努力が足りなかったからだ
外的・安定	自分の職場のテニス大会のレベルが高かったからだ
外的・不安定	たまたま運が悪かったからだ

考にして、刺激を作成し、このような状況におかれた場合に以下のような従属変数をどの程度感じるか、回答させた(Table 2)。坪田(1993)では状況文の登場人物の感情を推測させるという方法を用いており、Mikulincer et al.(1989)は自分がそのような状況に置かれた場合の感情を推測させている。これを本研究では、Mikulincer et al.(1989)にあわせて、自分がこのような状況に置かれた場合の感情を推測させた。一人の被参加者には、就職場面の1条件(1つの帰属情報)とスポーツ場面の1条件を提示したが、提示された帰属情報は各場面で異なるものを使用し、その組

み合わせは無作為とした。また、帰属情報として、坪田（1993）では、原因の方向の次元も用いられていたが、本研究では、自分の側の原因のみを使用し、就職場面、スポーツ場面それぞれにおいて内在性（2）×安定性（2）の4つの帰属情報を用いた（Table 3）。

従属変数

妬み関連感情 ねたましき、嫉妬、怒り、うらやましき、不安、悲しみといった6つの感情について、非常に強く感じる（6点）からまったく感じない（1点）までの6段階尺度を用いて回答させた。これらの項目は坪田（1993）で使用されたものをそのまま用いており、怒り、うらやましき、不安、悲しみの4つはSalovey & Rodin（1986）で妬みの下位感情として指摘されているものの中から選択したものであった。

妬み感情の規定要因 ①自尊感情の侵害 自尊感情の侵害については、自分のプライドが傷つけられたという気持ちをごどの程度感じるかという1項目で、非常に強く感じる（6点）からまったく感じない（1点）までの6段階尺度で回答させた。これは坪田（1993）で使用されたものをそのまま使用した。②獲得可能性 獲得可能性については、澤田・新井（2002）の項目を今回の状況文に合わせて表現を修正したものをを用いて、そう思う（4点）からそう思わない（1点）までの4段階尺度で回答させた。使用した項目は4項目で、就職場面では「いつかはAさんと同じように合格できる」、「Aさんと同じようにすることはそんなに難しいことではない」、「頑張ればAさんと同じように合格できる」、「Aさんと同じように合格することは自分にあふさわしい」の4項目を使用した。

能力・努力普遍観 能力・努力普遍観については、過去の能力感の研究の中から同じ大学生を対象とした越（1991）で使用された能力・努力感測定項目の中の能力・努力普遍性の因子の4項目を使用し、そう思う（5点）からそう思わない（1点）までの5段階尺度で回答させた。使用した項目は、「一つのことでも努力する人は他のことでもよく努力する」、「努力する人はたいていどんなことにも努力する」、「能力の高い人はどんなことをさせても良くできる」、「子どものときに能力の高い人は大人になっても能力が高い」であった。

結 果

能力・努力普遍観の分析と群分け

最初に、能力・努力普遍観の項目を普遍的であると思うほど高得点になるよう得点化して、4項目の平均値を算出した。その結果、平均値は3.34、標準偏差0.75であった。この平均値を基準としてこれより高得点の

Table 4 妬み関連感情の相関

	ねたましき	嫉妬	怒り	不安	うらやましき	悲しみ
ねたましき		0.79	0.55	0.31	0.42	0.10
嫉妬	0.71		0.58	0.37	0.62	0.15
怒り	0.61	0.37		0.31	0.32	0.14
不安	0.58	0.37	0.49		0.24	0.30
うらやましき	0.20	0.37	0.09	0.04		0.14
悲しみ	0.31	0.22	0.19	0.40	0.12	

上半分が就職場面、下半分がスポーツ場面

者を能力・努力普遍観高群、低得点の者を能力・努力普遍観低群に分類した。なお、使用した4項目の α 係数は.61であった。

妬み関連感情に関する分析

最初に、測定した6つの感情の関係を検討するため、場面ごとに6つの感情間の相関係数（Table 4）と α 係数を算出した。その結果、就職場面の α 係数は.77で、スポーツ場面では.77であった。また、ねたましきと他の5感情の相関を見ると、就職場面では悲しみとの相関が.10で、悲しみを削除した残り5感情の α 係数も.82となり、スポーツ場面ではうらやましきとの相関が.20で、うらやましきを削除した場合の α 係数は.80であった。以上のことから、就職場面では、悲しみを除いた5つの感情をまとめたものを、スポーツ場面ではうらやましきを除いた5つの感情をまとめたものを妬み感情群と命名し、個々の感情の検討とともに分析を行った。

次に、性や帰属情報、能力・努力普遍観による妬み感情への影響を検討するため、性（2）×内在性（2）×安定性（2）×能力・努力普遍観（2）の4要因の分散分析を就職とスポーツの場面ごとに実施した。

妬み感情群 ①就職場面 悲しみを除いた5つの感情の平均値を従属変数とした4要因の分散分析の結果、4要因の主効果と交互作用は全くみられなかった。

②スポーツ場面 うらやましきを除いた5つの感情の平均値を従属変数とした4要因の分散分析の結果、性の主効果（ $F_{(1,68)}=4.96, p<.05$ ）が有意であり、男性（ $M=2.97, SD=1.00$ ）が女性（ $M=2.60, SD=1.03$ ）よりも強かった。

また、性×内在性×能力・努力普遍観の交互作用（ $F_{(1,68)}=4.61, p<.05$ ）が有意であり、性×内在性の単純交互作用は能力・努力普遍観低群では有意であったが（ $F_{(1,68)}=4.01, p<.05$ ）、高群では有意でなかった。また能力・努力普遍観低群では性の単純単純主効果は内的原因で有意であり（ $F_{(1,68)}=10.76, p<.05$ ）、男性が女性よりも有意に強かったが、外的原因では有意でなかった。性×能力・努力普遍観の単純交互作用は内的

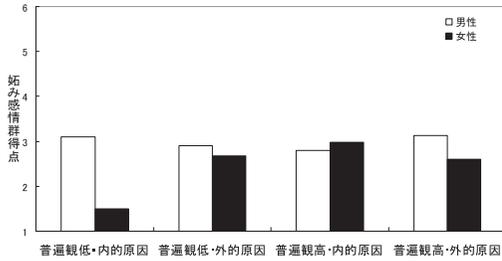


Fig. 1 スポーツ場面における妬み感情群の性 × 内在性 × 普遍観の影響

Table 5 就職場面における内在性 × 能力・努力普遍観のねたましざの平均値と標準偏差

	能力・努力普遍観低	能力・努力普遍観高
内的	3.82(1.33)	3.14(1.32)
外的	3.50(1.37)	4.48(1.11)

原因では有意であったが ($F_{(1,68)}=6.66, p<.05$), 外的原因では有意でなく, 内的原因では能力・努力普遍観の単純単純主効果は女性で有意であり ($F_{(1,68)}=9.20, p<.05$), 能力・努力普遍観高群が低群よりも有意に強かったが, 男性では有意でなかった。内在性 × 能力・努力普遍観の単純交互作用は女性では有意であったが ($F_{(1,68)}=5.13, p<.05$), 男性では有意でなく, 女性では内在性の単純単純主効果は能力・努力普遍観低群で有意であり ($F_{(1,68)}=5.84, p<.05$), 外的原因が内的原因よりも有意に強かったが, 高群では有意でなかった (Fig. 1)。

ねたましざ ①就職場面 内在性 × 能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=6.44, p<.05$) が有意であり, 内在性の単純主効果は能力・努力普遍観低群では有意でなかったが, 高群では有意であり ($F_{(1,68)}=8.42, p<.05$), 外的原因が内的原因よりも有意に強かった。能力・努力普遍観の単純主効果は内的原因では有意でなく, 外的原因で有意であり ($F_{(1,68)}=4.50, p<.05$), 能力・努力普遍観高群が低群よりも有意に強かった (Table 5)。

②スポーツ場面 性 × 内在性 × 能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=8.242, p<.05$) が有意であり, 性 × 内在性の単純交互作用は能力・努力普遍観低群では有意であったが ($F_{(1,68)}=6.75, p<.05$), 高群では有意でなく, 能力・努力普遍観低群では性の単純単純主効果は内的原因で有意であり ($F_{(1,68)}=10.51, p<.05$), 男

Table 6 就職場面における内在性 × 能力・努力普遍観の嫉妬の平均値と標準偏差

	能力・努力普遍観低	能力・努力普遍観高
内的	4.10(1.59)	3.38(1.28)
外的	3.67(1.58)	4.72(1.04)

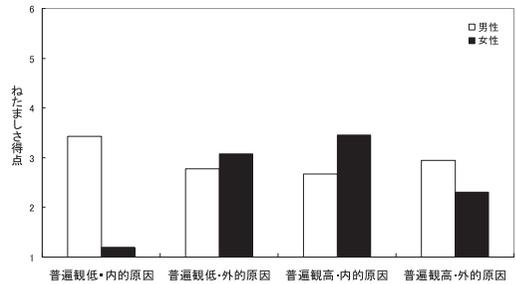


Fig. 2 スポーツ場面におけるねたましざに与える性 × 内在性 × 普遍観の影響

性が女性よりも有意に強かったが, 外的原因では有意でなかった。性 × 能力・努力普遍観の単純交互作用は内的原因では有意であったが ($F_{(1,68)}=9.61, p<.05$), 外的原因では有意でなく, 内的原因では能力・努力普遍観の単純単純主効果は女性で有意であり ($F_{(1,68)}=10.72, p<.05$), 能力・努力普遍観高群が低群よりも有意に強かったが, 男性では有意でなかった。内在性 × 能力・努力普遍観の単純交互作用は女性では有意であったが ($F_{(1,68)}=9.59, p<.05$), 男性では有意でなく, 女性では内在性の単純単純主効果は能力・努力普遍観低群で有意であり ($F_{(1,68)}=7.42, p<.05$), 外的原因が内的原因よりも有意に強かったが, 高群では有意でなかった (Fig. 2)。

嫉妬 ①就職場面 内在性 × 能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=6.101, p<.05$) が有意であり, 内在性の単純主効果は能力・努力普遍観低群では有意でなかったが, 高群では有意であり ($F_{(1,68)}=7.04, p<.05$), 外的原因が内的原因よりも有意に強かった。能力・努力普遍観の単純主効果は内的原因では有意でなく, 外的原因で有意であり ($F_{(1,68)}=4.28, p<.05$), 能力・努力普遍観高群が低群よりも有意に強かった (Table 6)。

②スポーツ場面 4 要因の主効果と交互作用は全くみられなかった。

怒り ①就職場面 安定性 × 能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=5.51, p<.05$) が有意であり, 安定性の単純主効果は能力・努力普遍観の高群, 低群ともに有意ではなかった。能力・努力普遍観の単純主効果は安定原因では有意でなかったが, 不安定原因で有意であり ($F_{(1,68)}=6.97, p<.05$), 能力・努力普遍観高群が低群よりも強かった (Table 7)。

Table 7 就職場面における安定性 × 能力・努力普遍観の怒りの平均値と標準偏差

	能力・努力普遍観低	能力・努力普遍観高
安定	2.96(1.40)	2.64(1.24)
不安定	2.16(1.22)	3.41(1.43)

Table 8 就職場面における内在性 × 安定性 × 能力・努力普遍観のうらやましさの平均値と標準偏差

	能力・努力普遍観低	能力・努力普遍観高
内的・安定 (能力)	5.11(0.72)	4.13(1.14)
内的・不安定 (努力)	4.58(1.21)	4.83(0.71)
外的・安定 (課題の困難度)	4.32(1.39)	5.25(1.06)
外的・不安定 (運)	5.35(0.71)	5.11(0.83)

Table 9 スポーツ場面における性 × 能力・努力普遍観の悲しみの平均値と標準偏差

	能力・努力普遍観低	能力・努力普遍観高
男性	3.84(1.26)	3.37(1.42)
女性	2.38(1.09)	3.49(1.47)

②スポーツ場面 4要因の主効果と交互作用効果は全くみられなかった。

うらやましさ ①就職場面 内在性 × 安定性 × 能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=5.70, p<.05$) が有意であり、内在性と安定性の単純交互作用は能力・努力普遍観低群では有意であったが ($F_{(1,68)}=4.80, p<.05$)、高群では有意でなかった。能力・努力普遍観低群での安定性の単純主効果は外的原因で有意であり ($F_{(1,68)}=4.19, p<.05$)、不安定原因が安定原因よりも強かったが、内的原因では有意でなかった。内在性と能力・努力普遍観の単純交互作用は安定原因で有意であり ($F_{(1,68)}=7.27, p<.05$)、不安定原因では有意でなかった。安定原因での内在性の単純主効果は能力・努力普遍観低群では有意でなかったが、高群で有意であり ($F_{(1,68)}=5.01, p<.05$)、外的原因が内的原因よりも強かった。安定性と能力・努力普遍観の単純交互作用は内的原因、外的原因ともに有意ではなかった (Table 8)。

②スポーツ場面 内在性 × 安定性 × 能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=4.00, p<.05$) が有意であったが、内在性と安定性の単純交互作用、内在性と能力・努力普遍観の単純交互作用、安定性と能力・努力普遍観の単純交互作用、いずれも有意ではなかった。

不安 ①就職場面 能力・努力普遍観の主効果 ($F_{(1,68)}=4.39, p<.05$) が有意であり、能力・努力普遍観高群ほど不安が強くなっていた (能力・努力普遍観高群 $M=4.93, SD=0.83$; 低群 $M=4.59, SD=0.92$)。

②スポーツ場面 性の主効果 ($F_{(1,68)}=5.71, p<.05$) が有意であり、男性の方が不安は強くなっていた (男性 $M=2.68, SD=1.44$; 女性 $M=2.14, SD=1.13$)。

悲しみ ①就職場面 4要因の主効果と交互作用効果は全くみられなかった。

②スポーツ場面 性 × 能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=5.53, p<.05$)、がみられ、性の単純主効果は能力・努力普遍観低群で有意であり ($F_{(1,68)}=9.43, p<.05$)、男性が女性よりも強かったが、高群では有意でなかった。能力・努力普遍観の単純主効果は、男性では有意でなく、女性で有意であり、能力・努力普遍観高群が低群よりも強くなっていた (Table 9)。

妬み感情の規定要因に関する分析

妬み感情の規定要因である自尊感情の侵害と獲得可能性が性、帰属情報、能力・努力普遍観によってどのように異なるのかを検討するため、性 (2) × 内在性 (2) × 安定性 (2) × 能力・努力普遍観 (2) の4要因の分散分析を就職とスポーツの場面ごとに実施した。

自尊感情の侵害 ①就職場面 能力・努力普遍観の主効果 ($F_{(1,68)}=5.43, p<.05$) が有意であり、能力・努力普遍観高群が低群よりも強くなっていた (能力・努力普遍観高群 $M=3.67, SD=1.36$; 低群 $M=2.78, SD=1.44$)。また、内在性 × 安定性の交互作用 ($F_{(1,68)}=4.65, p<.05$)、内在性 × 能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=4.18, p<.05$)、安定性 × 能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=4.16, p<.05$)、性 × 内在性 × 能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=10.81, p<.05$)、性 × 安定性 × 能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=5.58, p<.05$) が有意であった。

内在性 × 安定性の交互作用について、内在性の単純主効果、安定性の単純主効果ともに有意ではなかった。

内在性と能力・努力普遍観の交互作用について、内在性の単純主効果は有意ではなく、能力・努力普遍観の単純主効果は内的原因では有意でなく、外的原因で有意であり ($F_{(1,68)}=9.57, p<.05$)、能力・努力普遍観高群が低群よりも強かった (Table 10)。

安定性と能力・努力普遍観の交互作用について、安定性の単純主効果は有意ではなく、能力・努力普遍観の単純主効果は安定原因では有意ではなく、不安定原因

Table 10 就職場面における内在性 × 能力・努力普遍観の自尊感情の侵害の平均値と標準偏差

	能力・努力普遍観低	能力・努力普遍観高
内的	2.99(1.38)	3.08(1.56)
外的	2.26(1.46)	3.65(1.09)

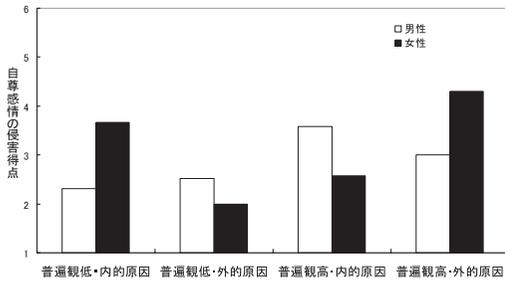


Fig. 3 就職場面における自尊感情の侵害に与える性 × 内在性 × 普遍観の影響

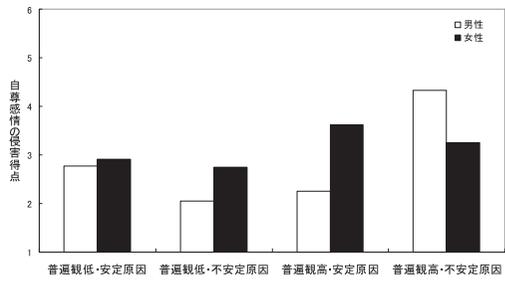


Fig. 4 就職場面における自尊感情の侵害に与える性 × 安定性 × 普遍観の影響

Table 11 就職場面における安定性 × 能力・努力普遍観の自尊感情の侵害の平均値と標準偏差

	能力・努力普遍観低	能力・努力普遍観高
安定	2.84(1.54)	2.94(1.30)
不安定	2.40(1.35)	3.79(1.36)

因で有意であり ($F_{(1,68)}=9.55, p<.05$), 能力・努力普遍観高群が低群よりも強かった (Table 11)。

性と内在性と能力・努力普遍観の交互作用について、性と安定性の単純交互作用は能力・努力普遍観低群でも ($F_{(1,68)}=4.33, p<.05$), 高群でも ($F_{(1,68)}=6.59, p<.05$) 有意であり、能力・努力普遍観低群における性の単純単純主効果は内的原因で有意であり ($F_{(1,68)}=4.57, p<.05$), 女性が男性より強くなっていったが、外的原因では有意ではなかった。能力・努力普遍観低群における内在性の単純単純主効果は男性では有意ではなく、女性で有意であり ($F_{(1,68)}=6.85, p<.05$), 内的原因が外的原因よりも強かった。能力・努力普遍観高群における性の単純単純主効果は内的原因では有意でなく、外的原因では有意であり ($F_{(1,68)}=4.17, p<.05$) 女性が男性よりも強かった。能力・努力普遍観高群における内在性の単純単純主効果は男性では有意ではなく、女性で有意であり ($F_{(1,68)}=7.37, p<.05$), 外的原因が内的原因よりも強かった。性と能力・努力普遍観の単純交互作用は内的原因 ($F_{(1,68)}=6.95, p<.05$), 外的原因 ($F_{(1,68)}=4.06, p<.05$) ともに有意であり、内的原因における性の単純単純主効果は能力・努力普遍観低群では有意であり ($F_{(1,68)}=4.57, p<.05$), 女性が男性より強くなっていったが、高群では有意でなかった。内的原因における能力・努力普遍観の単純単純主効果は男性では有意であり ($F_{(1,68)}=4.03, p<.05$), 能力・努力普遍観高群が低群よりも強かったが、女性では有意でなかった。外的原因における性の単純単純主効果は能力・努力普遍観低群では有意でなく、高群で有意であり ($F_{(1,68)}=4.57, p<.05$), 女性が男性より強かった。

性と安定性と能力・努力普遍観の交互作用について

Table 12 就職場面における安定性 × 能力・努力普遍観の獲得可能性の平均値と標準偏差

	能力・努力普遍観低	能力・努力普遍観高
安定	2.52(0.71)	2.96(0.42)
不安定	3.00(0.54)	2.60(0.71)

て、性と安定性の単純交互作用は能力・努力感低群では有意でなく、高群で有意であった ($F_{(1,68)}=7.43, p<.05$)。能力・努力普遍観高群における性の単純単純主効果は安定原因で有意であり ($F_{(1,68)}=4.64, p<.05$), 女性が男性より強かったが不安定原因では有意でなかった。能力・努力普遍観高群における安定性の単純単純主効果は男性で有意であり ($F_{(1,68)}=10.71, p<.05$), 不安定原因が安定原因より強かったが、女性では有意でなかった。性と能力・努力普遍観の単純交互作用は安定性のいずれの水準においても有意でなかった。安定性と能力・努力普遍観の単純交互作用は男性では有意であり ($F_{(1,68)}=9.69, p<.05$), 女性では有意でなかった。男性における安定性の単純単純主効果は能力・努力普遍観低群では有意でなく、高群で有意であり ($F_{(1,68)}=10.71, p<.05$), 不安定原因が安定原因より強かった。男性における能力・努力普遍観の単純単純主効果は安定原因では有意でなく、不安定原因で有意であり ($F_{(1,68)}=12.86, p<.05$), 能力・努力普遍観高群が低群よりも強かった (Fig. 4)。

②スポーツ場面 能力・努力普遍観 ($F_{(1,68)}=9.37, p<.05$) の主効果が有意であり、能力・努力普遍観高群が低群よりも強くなっていった (能力・努力普遍観高群 $M=3.35, SD=1.23$; 低群 $M=2.46, SD=1.47$)。

Table 13 スポーツ場面における性 × 安定性の獲得可能性の平均値と標準偏差

	安定	不安定
男性	2.55(0.73)	2.31(0.61)
女性	2.10(0.64)	2.50(0.46)

Table 14 妬み関連感情と妬み感情規定要因に関する分析結果の一覧表

		就職場面		スポーツ場面	
従属変数		有意であった効果	下位検定の結果	有意であった効果	下位検定の結果
妬 み 関 連 感 情	妬み感情群	なし		性 性×内在性×能力・努力普遍 観	男性>女性 L群・内的 男性>女性 L群・女性 内的<外的 女性・内的 L群<H群
	ねたましさ	内在性×能力・努力普遍観	H群 内的<外的 外的 L群<H群	性×内在性×能力・努力普遍 観	L群・内的 男性>女性 L群・女性 内的<外的 女性・内的 L群<H群
	嫉妬	内在性×能力・努力普遍観	H群 内的<外的 外的 L群<H群	なし	
	怒り	安定性×能力・努力普遍観	不安定 L群<H群	なし	
	うらやましさ	内在性×安定性×能力・努 力普遍観	H群 内・安<外・安 L群 外・安<外・不	内在性×安定性×能力・努力 普遍観	有意差なし
	不安	能力・努力普遍観	L群<H群	性	男性>女性
	悲しみ	なし		性×能力・努力普遍観	L群 男性>女性 女性 L群<H群
妬 み 感 情 規 定 要 因	自尊感情の 侵害	能力・努力普遍観 内在性×安定性 内在性×能力・努力普遍観 安定性×能力・努力普遍観 性×内在性×能力・努力普 遍観 性×安定性×能力・努力普 遍観	L群<H群 有意差なし 外的 L群<H群 不安定 L群<H群 L群・女性 内的>外的 H群・女性 内的<外的 男性・内的 L群<H群 女性・外的 L群<H群 H群・安定 男性<女性 H群・男性 安定<不安定 不安定・男性 L群<H群	能力・努力普遍観	L群<H群
	獲得可能性	安定性×能力・努力普遍観	L群 安定<不安定 安定 L群<H群	性×安定性	安定 男性>女性

内的:内的原因 外的:外的原因 安定:安定原因 不安定:不安定原因 H群:能力・努力普遍性高群 L群:能力・努力普遍性低群を表す

獲得可能性 ①就職場面 使用した4項目の平均値を従属変数とした (α 係数 = .67)。安定性×能力・努力普遍観の交互作用 ($F_{(1,68)}=7.55, p<.05$) が有意であり, 安定性の単純主効果は能力・努力普遍観低群で有意であり ($F_{(1,68)}=5.06, p<.05$), 不安定原因が安定原因より強かったが, 高群では有意でなかった。能力・努力普遍観の単純主効果は安定原因で有意であり ($F_{(1,68)}=4.23, p<.05$), 能力・努力普遍観高群が低群より強かったが, 不安定原因では有意でなかった (Table 12)。

②スポーツ場面 使用した4項目の平均値を従属変数とした (α 係数 = .69)。性×安定性の交互作用 ($F_{(1,68)}=4.30, p<.05$) が有意であり, 性の単純主効果は安定原因で有意であり ($F_{(1,68)}=4.31, p<.05$), 男性が女性より強かったが, 不安定原因では有意でなかった。安定性の単純主効果は, 性のいずれの水準においても有意でなかった (Table 13)。

これまでの結果を一覧にしたものが Table 14である。Table 中のアンダーラインは能力・努力普遍観が

Table 15 妬み感情と規定要因の関連性
(標準偏帰係数)

目的変数	自尊感情の侵害	獲得可能性	R ²
就職場面の妬み感情群	.52*	-.04	.25*
就職場面のねたましさ	.51*	-.03	.27*
スポーツ場面の妬み感情群	.42*	.18	.29*
スポーツ場面のねたましさ	.49*	.16	.23*

*p<.05

関係している主効果と交互作用効果を示している。

妬み感情と規定要因との関連性の分析

自尊感情の侵害と獲得可能性が妬み感情の規定要因として考えられるものであるのかどうかを検討するため、妬み感情群とねたましさを目的変数、自尊感情の侵害と獲得可能性を説明変数とした重回帰分析を場面ごとに実施した (Table 15)。いずれの目的変数においても自尊感情の侵害が有意な標準化係数を示していたが獲得可能性のそれは有意でなかった。

考 察

仮説の検証

本研究では、過去の帰属と妬みの関係の研究結果における安定性の影響の問題点について、能力・努力普遍観の要因を導入し、能力・努力普遍観高群では低群に比べて、安定性の次元の効果がみられやすく、不安定な原因ほど妬みを強く感じるとの仮説を検証した。しかし、上記のような安定性と能力・努力普遍観の要因を含む交互作用効果がみられたのは、妬み関連感情においては就職場面における怒り、うらやましさの2つで、妬み感情の規定要因の中では就職場面における自尊感情の侵害と獲得可能性であり、下位検定の結果はほとんどが予測したものとは異なっていた。唯一、予測と合致した方向性は自尊感情の侵害のみであった。このことから仮説は支持されなかった。

この原因として本研究で用いた能力・努力普遍観の問題が考えられる。本研究では大学生を実験参加者としたため、能力感の研究の中から同じ大学生を対象とした越 (1991) の尺度を使用した。この尺度では能力と努力を一体化したもの、すなわち能力を普遍的だと考える者は同時に努力も普遍的だと考える者であるとみなす。この部分をもっと細かく分類することが必要なのではないだろうか。つまり能力と努力それぞれに対する普遍観を独立に測定し、能力も努力もともに普遍的だと考える者、能力は普遍的だが努力は違うと

考える者、努力は普遍的だが能力は違うと考える者、能力も努力もともに変わりやすいと考える者といった分類にすることで、帰属と妬みの関係に及ぼす普遍観の影響を詳細に分析することが可能であろう。このように能力や努力に対する普遍観を詳細に分類することは今後の課題であろう。

能力・努力普遍観の効果の検討

本研究では、帰属と妬みの関係の検討に能力・努力普遍観の要因を導入したが、ここでは、その導入した普遍観の効果について検討する。Table 14をみると、本研究でみられた効果のうち、そのほとんどが能力・努力普遍観の要因がかかわっている (種々の従属変数においてみられた主効果と交互作用は全部で20あるが、その中で能力・努力普遍観がかかわらないものは4つ)。上述のように本研究で使用した能力・努力普遍観の項目は不十分であったかもしれないが、帰属と妬みの関係を検討する上で、この能力・努力普遍観は考慮すべき変数といえるであろう。

本研究で得られた結果に対する解釈

妬み関連感情における内在性の効果 就職場面のねたましさ、嫉妬およびスポーツ場面の妬み感情群、ねたましさで、内在性を含む効果がみられ、その方向はすべて、外的原因が内的原因より強くなっていた。

この結果は、坪田 (1993) と一致する方向であり Mikulincer et al. (1989) の結果とは逆方向であった。本研究で用いた状況は坪田 (1993) を参照したものであるが、異なるのが本研究では自分がそのような状況に置かれたときの感情を推測させたのに対し、坪田 (1993) では登場人物がどのように感じると思うかといった他者の感情を推測させた点である。いずれの方法においても内在性の影響の方向は一致しており、内在性に与える影響としては、感情を推測させる視点の違いは影響しないといえよう。

また、坪田 (1993) と同様、Mikulincer et al. (1989) とは逆方向の結果であったことは、使用した状況に外的原因が妬みを強めるものがあることを示唆しているのかもしれない。具体的にその特性が何かは今後の検討課題だが、状況の特殊性も考慮する必要がある。

妬み感情規定要因における内在性の効果 就職場面の自尊感情の侵害のみに効果がみられ、能力・努力普遍観低群の女性は内的原因ほど強く、能力・努力普遍観高群の女性は外的原因ほど強くなっていた。

Table 1をみると能力・努力普遍観高群にとっての内的原因は内的でかつ安定的な原因と認識されやすい。安定的な原因であるためどうせ次もダメだろうと諦めの気持ちが生じることも考えられる。諦めてしまえば自尊感情は傷つかない。自己評価を維持する方略の一

つとして比較次元の重要度を下げること(大事であると考えていたものをどうでもいいと考え直すこと)で自己評価の低下を防ぐことが指摘されているが、これと似た現象が起きたのかもしれない。したがって、能力・努力普遍観高群では外的原因ほど自尊感情の侵害を強く感じたことが考えられる。一方、能力・努力普遍観低群は Table 1 より内的原因は不安定な原因でもあるため諦めにはつながりにくかったのかもしれない。ただし、これが女性のみで見られた理由は不明である。

また、この結果は内在性における問題点の解決の可能性を示すものとも考えられる。内在性の結果では、内的原因ほど妬みを強く感じる結果と外的原因ほど妬みを強く感じる結果の両方が示されている。本研究で見られたこの結果は、ある要因の水準によって内在性の効果が逆方向になるという結果であり、その要因が内在性の矛盾する結果を媒介する可能性を示している。本研究で取り上げた能力・努力普遍観は妬み関連感情においてこのような効果がみられなかったため当該の要因とはいえないが、今後帰属と妬みの関連に影響すると思われる要因を整理することで矛盾する結果を媒介する要因を見つけ出すことも可能かもしれない。

妬み関連感情と妬み感情規定要因における安定性の効果 妬み関連感情では安定性の次元の効果はみられず、妬み感情規定要因では、就職場面の自尊感情の侵害と獲得可能性にみられ、能力・努力普遍観高群の男性で不安定原因ほど自尊感情の侵害が強く、能力・努力普遍観低群で不安定原因ほど獲得可能性が強かった。

前者の結果については、妬み感情規定要因における内在性の効果で述べた安定原因との認識が諦めにつながるという解釈で説明できる結果であろう。Table 1 より、能力・努力普遍観高群では安定次元の原因は全て安定原因と認識されやすい。安定原因であるほど諦めにつながるであれば不安定次元の原因では諦めきれず自尊感情が脅かされたと考えられよう。ただし、これも男性のみで見られた理由は不明である。

また後者の結果については、その方向性は仮説と一致しているが、より効果がみられやすいと予想した能力・努力普遍観高群ではなく、低群のみであった。その理由は不明であるが、今後、普遍観に対する考え方を整理し、細かく分類していく中でこの結果の安定性を検討する必要がある。

妬み感情と規定要因の関連性 自尊感情の侵害および獲得可能性と各場面の妬み感情群やねたましさの関係を重回帰分析で検討したところ、いずれにおいても自尊感情の侵害のみが関係していた。

澤田・新井(2002)は、小学校高学年以上であれば獲得可能性が高いほど妬み感情が強いことが示してい

るが、その際の説明変数は、領域重要度、妬み傾向、獲得可能性の3つであり、自尊感情の侵害は含まれていない。重回帰分析は投入した説明変数の中での関係性の強さを示すもので、もし自尊感情の侵害が非常に強い影響力を持つとすればこれを含んだ説明変数の場合、その他の変数の関係性は低くなる。これによって獲得可能性の強さがみられなかったことも考えられる。

【引用文献】

- Dweck, C. S. (1986). Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, 41, 1040-1048.
- Hayamizu, T., Ito, A., & Yoshizaki, K. (1989). Cognitive motivational processes mediated by achievement goal tendencies. *Japanese Psychological Research*, 31, 179-189.
- 越良子 (1991). 大学生の能力・努力感に関する研究 広島大学教育学部紀要 第1部, 40, 103-107.
- Mikulincer, M., Bizman, A., & Aizenberg, R. (1989). An attributional analysis of social-comparison jealousy. *Motivation and Emotion*, 13, 235-258.
- Salovey, P., & Rodin, J. (1986). The differentiation of social-comparison jealousy and romantic jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1110-1112.
- 澤田匡人 (2006). 子どもの妬み感情とその対処 新曜社
- 澤田匡人・新井邦二郎 (2002). 妬みの対処方略選択に及ぼす、妬み傾向、領域重要度、および獲得可能性の影響 教育心理学研究, 50, 246-256.
- 詫摩武俊 (1975). 嫉妬の心理学—一人間関係のトラブルの根源 光文社
- 坪田雄二 (1993). 原因帰属が社会的比較によって生じる嫉妬感情に与える影響 実験社会心理学研究, 33, 60-69.
- 坪田雄二 (2011). 妬みの生起における予期の役割 対人社会心理学研究, 11, 101-108.
- Weiner, B. (1979). A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology*, 71, 3-25.
- Weiner, B. (1985). Attributional theory of achievement motivation and emotion. *Psychological Review*, 92, 548-573.
- Weiner, B., Frieze, L., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R. M. (1972). Perceiving the causes of success and failure. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. New Jersey: General Learning Press.